
アイドルになるには

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルになるには

【Nコード】

N1420Y

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アイドル志望の彩奈は見事アイドルになれた。彼女がアイドルになれた最大の理由は何か。ヒロインのモデルは某声優さんですが作品は遠藤淑子さんの漫画からヒントを得ています。

第一章

アイドルになる

には

雑誌の広告にだ。それはあつた。

それを見てだ。柳田彩奈は思った。

「私もアイドルになれるかな」

こつだ。無邪気に思ったのである。

小柄で少し太めだがだ。カマボコ型の少し大きい目の童顔で口も程よい大きさだ。黒髪を伸ばしそこに微かに茶色をかけている。

眉は細く長い。それで緩やかなカーブを描いている。確かに小柄だが胸は大きいしひらひらのミニスカートから見える脚もいい。

その彼女がだ。ある雑誌のタレント募集の広告を見て思ったのである。

「若しかすると」

それは家で思いついつい口に出していた。そしてだ。

たまたまそこに母親もいた。顔は彼女と生き写しだ。背まで同じく小柄だ。

その母親がだ。娘に言った。

「じゃあオーディション受けてみたら？」

「募集に応えてよね」

「そうよ。駄目で元々じゃない」

母親は実にあっけらかんとして娘に言う。

「だからよ。どう？」

「ううんと。結構大きな事務所だけれど」

彩奈どころか誰でも知っている様な事務所である。その広告を出しているのは。

「受かるかな」

「大きくても小さくても同じよ」

「事務所は？」

「受かる受からないはあんたの資質よ」

それによるというのだ。

「それ次第よ」

「私の」

「そう。人は見るから」

彩奈がだ。アイドルになれてそれでどうかということなのだ。というのだ。

「だからね。大きい事務所でもよ」

「怯まずに、なのね」

「いい？アイドルとは何か」

母親は熱い口調になった。

「それはね。聖子ちゃんや明菜ちゃんみたいだね」

「何か古くない？」

「じゃあ高橋由美子ちゃんとか深田恭子にしとく？」

「その人も昔の人じゃない」

「それじゃあ誰がいいのよ」

「今はAKBの時代だから」

彩奈が話に出すのは彼女の時代の話だった。つまり今である。

「だから。渡辺麻衣ちゃんとか峰岸みなみちゃんとかね」

「ああした娘達みたいになりたいのね」

「そう。ひらひらの服を着て歌って踊って」

「それ昔もだから」

そうした意味ではアイドルは今も昔も同じであった。

「聖子ちゃんや明菜ちゃんもね」

「お母さんの年代はそうなのね」

「丁度お母さんが中学校の頃が聖子ちゃんや明菜ちゃんの黄金時代だったのよ」

何気に自分の年代もばらしまっている。

「もう凄かったから」

「うん、ちょっとわからないけれど」

「とにかく。アイドルになりたいのならよ」

「まずはオーディションを受けることなのね」

「履歴書書きなさい」

最初の一步はそれだというのだ。

「いいわね」

「うん、それじゃあ」

こうしてだ。彩奈はまずは履歴書を書いてそれを事務所に送った。程なくしてオーディションの時間と場所を書いたパンフレットが送られてきた。

それを受けてだ。彼女は意気込んでだ。

オーディションの会場に向かった。そこには母も付き添っている。その母にだ。

彼女はだ。首を傾げさせて尋ねた。

「何でお母さんが？」

「だって。心配だから」

「私がアイドルになれるかどうか？」

「そう、だからね」

それについてきたというのだ。

第二章

「お母さんこれでもアイドル好きだし」

「自分の娘がアイドルになれるかどうか気になるの」

「そういうことよ。だからね」

「わかったわ。何かお母さんが一緒って恥ずかしいけれど」

「気にしない気にしない」

「気になるわよ」

こうしてだった。母も一緒にいるのだった。

待合室には彩奈の他に何人も候補者が集っていた。見ればどの娘も可愛い。その娘達を見てだ。彩奈は不安な顔になり母に囁いた。

「私大丈夫かしら」

「大丈夫だと思うの」

「そう思えばいいの?」

「自分は絶対にトップアイドルになるんだってね」

そう思えばいいというのだ。

「いい? 目指すは北乃きいちゃんよ」

「やっと今のアイドルになったわね」

「そうでしょ。お母さんだって勉強したのよ」

アイドルについてである。これも勉強なのだ。

「だからね。いいわね」

「北乃きいさんみたいになのね」

「そう、オーディションなんて通過点だから」

トップアイドルになるにはそれすらもだというのだ。

「わかったわね。それじゃあね」

「うん、それじゃあ」

「どんといきなさい」

まさに背中を押す感じだった。

「いいわね」

「どんとね」

「そう、どんとよ」

いけと娘に言っただ。そうしてだった。

彩奈はオーデイションに向かうことになった。ここぞだ。

事務所側からだ。オーデイションを受ける娘達、彩奈も含めてだ。

差し入れがあつた。それは。

「お昼御飯ですか」

「はい、お弁当です」

若い綺麗な女の人だ。彩奈達に話す。眼鏡をかけて髪を後ろで上にあげてまとめている。スーツがとてもよく似合っている。

その人がだ。にこやかな笑顔で彩奈達に言うのである。

「私が作ったんですよ」

「そうなんですか」

「とても精のつくお弁当ですから」

こう彩奈達に話していく。

「ですからどうか召し上がってそれで」

「オーデイションにですね」

「皆さん挑んで下さい」

こう言っただであつた。彩奈達にそのお弁当を食べる様に勧めるのだった。そのお弁当はというと。

サンドイッチだった。その中に色々入っている。その入っているものを見てだ。

彩奈の母がだ。急に剣呑な顔になった。そうして言うのだった。

「しめ鯖？それに納豆にキムチにザーサイにマスタードって」

「あと焼きそばも入っているわね」

「これは酷いわね」

その中身を見てだ。母は言うのである。

「その他にも何か色々」と

「ホルモンも入っているわね」

「サンドイッチの具じゃないわね」

母は断言した。

「間違ってもね」

「あれっ、けれど」

しかしだった。もうだ。彩奈は食べはじめていた。そのサンドイッチを手に取ってもぐもぐと食べている。そうして「う言っのである。」

「美味しいわよ」

「あんたもう食べてるの」

「うん、美味しいけれど」

「大丈夫なの、食べても」

「だから美味しいけれど」

そのサンドイッチを食べながらの言葉だ。

「全然平気だけれど」

「平気って」

「だから美味しいけれど」

また言う彩奈だった。

「それも全然」

「そういえばあんた昔から何でも食べるわよね」

「好き嫌いないのが自慢よ」

それこそ何でも食べる。食べないものなぞないのだ。

「だからね」

「それは知ってるけれど」

母だからだ。このことは誰よりもよく知っていた。

第三章

「けれどそれでもよ」

「それでも？」

「あんたこのサンドイッチは本当に危ないから」

「だから美味しいから」

「美味しい以前の問題よ」

その具を見てまだ言うのである。

「本当に食べて大丈夫なの？」

「大丈夫よ、こんなの」

こんなことを言いながらだ。彼女は平然と食べていく。見れば他の娘達も恐る恐るだが食べていく。しかしだ。

すぐにだ。彩奈以外全員だ。血相を変えてトイレに駆け込んでいく。それを見てだ。

彩奈は何が何なのかという顔でだ。こう言うだけだった。

「皆どうしたのかしら」

「あんた大丈夫なの」

「だから全然平気だから」

こう言うだけだった。言いながらだ。

そのうえでだ。母に尋ねた。見れば母の前にもそのサンドイッチがある。ついでに言えば茶は赤と緑と白が混ざり合った最高の色だ。

その茶も見ながらだ。彩奈は母に問うた。

「お母さんのサンドイッチとお茶も貰っていいかしら」

「別にいいけれど」

娘が何ともないことに驚きながら娘に答える。

「けれど食べるの」

「お腹空いてるから。緊張してるからよね」

それでだというのだ。

「頂戴。それじゃあ」

「何だかんだで食べるのね」

「緊張していたら余計にお腹が空くのよ」

「それでだというのだ。」

「じゃあ貰うわね」

「うん、それじゃあ」

こうしてだった。彩奈は母の分のサンドイッチも食べるのだった。その頃事務所のスタッフの部屋では。

スタッフ達がだ。大騒ぎして言い合っていた。

「何っ！？喜多村君の弁当を女の子達に出した！？」

「それでオーデイションを受ける女の子が皆食べたって！？」

「それってまずいだろ」

「死ぬぞそれ！」

ここまで言われるのだった。

「おい、今回のオーデイションどうなるんだよ」

「誰があの子に飯作らせたんだよ」

「タレント候補に劇薬食わせてどうするんだ」

「オーデイションどころじゃないだろ」

スタッフ達はオーデイションができるかどうかということすら危うんだ。とにかくその彼女の作ったサンドイッチが大惨事を引き起こすと思っていた。

実際にだ。彼等のところに来た報告は。

「全滅か」

「皆トイレに駆け込むか気絶か」

「食中毒みたいになってるらしいな」

「本当にオーデイション駄目だな」

「ああ、折角アイドル発掘しようって思ってたのにな」

「有望な新人な」

「それこそ第二の伊藤つかささんな」

彼等は全てが終わったと思っていた。しかしだ。

希望というものはあらゆる災厄の後に残っている。彼等について

もそうだった。

暗澹たる気持ちになり絶望する彼等にだ。この話が来た。

「えっ、一人!？」

「一人残ってるって!？」

「一人だけぴんぴんしてるって？」

「それ本当なのか？」

「喜多村のサンドイッチを食って」

「お茶まで飲んで」

それを聞いてだ。スタッフ達はまずは驚いた。しかしだ。

それは事実でだ。オーディションを受ける娘達の控え室にだ。

彩奈だけが残っていたのだ。その話を聞いてだ。

誰もがだ。こう言うのだった。

第四章

「おい、それじゃあな」

「その娘の面接やってみるか？」

「それにオーディションな」

「その娘だけでもな」

「そうするか」

こつ話をしてだった。彼等はだ。

彩奈の面接とオーディションをすることを決めたのだった。その面接とオーディションはというと。

何の変哲もなかった。ごく普通に彩奈の自己紹介や特技を聞いてそうしてだ。歌やダンスを見た。本当に何の変哲もないものだった。

彩奈はだ。全て終わり家に帰る時にだ。こつ母に言った。

「私一人だけだったね」

「面接もオーディションもね」

「そうね。私一人だけだったわ」

「皆おトイレに行くか気絶したからね」

「何でかしら」

彩奈は母の言葉に首を捻って言う。

「食中毒かしら」

「あのサンドイッチとお茶のせいよ」

母にはわかっていた。全てだ。

「あんなの食べたらそれこそね」

「それこそ？」

「ああなるから」

食中毒が気絶にだというのだ。

「何であんただけ平気なのよ。っていうか」

「っていうか？」

「あんた昔から何があっても病気になるいしお腹壊さないし怪我

もしないわね」

「そういえばそうね」

「我が娘ながら」

呆れているがそれと共にだ。感心している顔で娘に言うのだった。

「物凄く丈夫ね」

「健康なのはいいことじゃない」

「ジープみたいね」

丈夫なことが取り得の軍用車だ。戦車は細かい部品も多く整備が大変だがジープはそこまでいかない。ある意味戦車より丈夫だ。

母自身の口からだ。彩奈はそれだというのだ。

「あんたって」

「ジープねえ」

「まあ。少なくともね」

「全部終わったわよね」

「後は結果待ちよ」

「こう言うのだった。」

「焦らずに待ちなさいね」

「うん、それじゃあ」

こうしてだった。彩奈は全てを終えた。そうして数日後。

通知が来た。それを送る際だ。

事務所側はだ。こう言い合っていた。

「スタイルはまあ。胸があるな」

「小柄で童顔。これが売りになるな」

「歌はそこそこか」

「平均点か？これじゃあな」

「どうかというのだ。平均点ならだ。」

「ちよつと物足りないな」

「ダンスがなあ。これは」

「かなりまずいかもな」

「けれどな」

それでもだというのだった。ここで。

「あれだけ頑丈だとな」

「ああ、野生の生き物みたいだな」

「あんなの食って全然平気ならな」

「体力勝負のアイドルでもな」

「やっていけるな」

こう判断するのだった。

「人間結局は体力だからな」

「ランボーやターミネーターみたいだけれどな」

「だがそれがいい！」

こんな断言まで出て来た。

「一人しかいないせいもあるけれどな」

「この体力だよ」

まさにだ。その体力を買われてだ。彼等は結論を出したのだった。

「合格だな」

「採用するか」

「例え何があっても生きられる娘みたいだしな」

「核戦争の後でも生きられる体力」

「これを買うか」

彩奈は合格となった。見事だ。

第五章

その合格通知を見てだ。母はだ。

妙に納得した顔になってだ。こつ娘に言った。

「よかつたけれどね」

「けれどつて。何か引つ掛かる言い方だけれど」

「あんた、多分体力買われたから」

「体力？」

「そう、ルックスや歌じゃないから」

それはよくわかることだった。母だからこそ。

「まあそれでも合格は合格ね」

「私も晴れてアイドルなのね」

「頑張りなさい。これは第一歩よ」

アイドルになるだ。それだというのだ。

「大変なのはこれからだから。けれど」

「けれどなのね」

「あんたなら何があつても大丈夫でしょ」

ここでもだ。娘の体力を考えて言うのだった。

「それこそ魔界都市の中でも生きられるでしょ」

「魔界都市つて。そういう小説あつたわよね」

「あつたわ。とにかくあんたなら大丈夫だから」

「よくわからないけれどアイドルとしてやっていけるんなら」

彩奈は能天気になつて述べた。

「私頑張るわね」

「ええ、頑張りなさい」

ここでは温かい笑顔で言う母だった。

「お母さんもお父さんも応援するからね」

「応援してくれるの」

「当たり前でしょ」

「こつだ。彩奈に言うのである。」
「アイドルなのよ、アイドル」
「アイドルだからなの」
「そう、アイドルだからよ」
母は笑顔で娘に話すのだった。
「アイドルはもうね。天使なのよ」
「天使なの？」
「そうよ。だったら応援せずにはいられないわよ」
こつだ。目を輝かせて話すのである。
「わかったわね。それじゃあね」
「それじゃあなの」
「そうよ。だから目指すのはね」
目をさらに輝かせてだ。娘に話す。
「松田聖子ちゃんよ」
「聖子さんのの」
「それか中森明菜ちゃんか」
「物凄いトップアイドルなんだけれど」
二人共だ。まさに伝説と言っていい存在だ。
それになれとだ。娘にハツパをかけて言うのである。
「なれる訳ないじゃない」
「なるうと思えばなれるわよ」
「なるうと思えばなの」
「そう、だから空を見なさい」
青空だ。見事なまでに晴れ渡った。
その雲一つ青空を娘にも見る様に言って。そのうえでの言葉は。
「あの一際輝く星があるわね」
「青空に？」
「青空でも星はあるのよ」
「明るいから見えないだけだ。科学の授業でも習うことだ。」
「その星こそがね」

「お母さん巨人嫌いじゃないの？」

「巨人！？北朝鮮と同じよ」

つまり究極の独裁主義にあるというのだ。

「お父さんもお母さんも言ってるでしょ。巨人だけは応援したら駄目よ」

「私横浜ファンだから」

彩奈はこのことは素っ気無く返した。

「巨人なんか嫌いだから」

「それはいいことよ」

ちなみのこの母親と父親は日本ハムファンだ。それぞれ。

「とにかくよ。その一際輝く星がね」

「アイドルの星なのね」

「その星を目指して駆け上がりなさい」

そして今度言う言葉は。

「果てしないアイドル坂をね」

「今度は未完に終わりそうね」

こんな話をしてだった。二人は何時の間にか出て来ていた庭を後にしてだ。家の中に入ったのだった。

何はともあれ彼女はアイドルになった。そのマネージャーは喜多村さんになった。

喜多村さんは親切でしかもできるマネージャーだった。その彼女のマネージングでだ。彩奈は確実にアイドルとしての資質を身に着けていきテレビやラジオ、グラビアで活躍する様になっていた。特に。

第六章

ドラマで活躍した。特撮番組で一年のレギュラーと普通のドラマの役をそれぞれ掛け持ちした。しかもだ。

学生生活も並行させる。そんな彼女を見て事務所側はまた驚いた。

「タフだな」

「ドラマのレギュラー二つにグラビアの仕事もあってな」

「しかもラジオも出てるんだろ？」

「歌だって歌ってるし」

「コンサートの予定も入ってるしな」

「しかもだよ」

そうした仕事に加えてだった。

「学生生活もちゃんとやってるしな」

「流石に出席日数は減ってるらしいけれどな」

「それでも凄いな」

「あれだけやって弱音一つ吐かない」

「しかも疲れた顔も見せない」

「何処までタフなんだ」

彼等にしても驚くべきことだった。しかもだ。

それに加えてだった。彼等が驚くどころか信じられないことは。

「喜多村君の作った料理をいつも食べてだからな」

「それで平気なんてな」

「ちよつとないだろ」

「有り得ないぞ」

何とだ。喜多村さんの作った料理をいつも食べてもだ。平気なのである。事務所側は作る喜多村さんも食べる彩奈も止めようとした。しかしなのだ。

彼女は平気で、しかも美味しそうに食べる。それを見てだ。

彼等はだ。こう言うのだった。

「あれだけ丈夫だとনা」

「ああ、あの娘ひょっとして」

「立てるか？頂点に」

「アイドル界の」

そうなるのではないかと思ったのだ。それでだ。

彼等はだ。決めたのだった。

「よし、あの娘はな」

「ああ、事務所としてもこれまで以上に売り出すぞ」

「あの娘をな」

「そうするぞ」

こうしてだった。彩奈は事務所のバックアップも受けてだ。アイドルとして日に日に大きくなり。遂には。

その松田聖子に匹敵するアイドルになった。中森明菜にも。そのことについてだ。彼女はこう言うのだった。

「マネージャーの喜多村さんのお陰です」
にこりと笑って言う。しかしだ。

詳しいことを知る者はだ。誰もがこう言うのだった。

「全ては体力だな」

「人間どれだけ頑丈かだよ」

「それ次第で何ができるか決まるんだよ」

「アイドルでも何でもな」

これが彼等の言葉だった。そしてだ。

彼女の母もだ。トップアイドルになった娘に言うのだった。

「まあ。絶対病気にもならないし怪我にもならないしダウンしないしね」

「健康なのはいいことよね」

「鉄人はね」

「鉄人？」

「そう、鉄人なのはね」

それはいいことだとだ。娘本人に言うのである。

「何でもできるから」

「何かそう言われると」

「漫画のあのロボットみたいだっというのね」

「それかプロ野球選手か」

あの広島の黄金時代を築いた名選手のことである。尚その背番号は永久欠番になっており地元ではもう一人の看板選手と共に神になっている。

「そうなるけれど」

「だからよ。丈夫なのはね」

「それがいいの」

「第一にあつてしかも」

尚且つだと。母は言葉を続ける。

「一番大事なことなのよ」

「健康第一ってことね」

「アイドルになるにもね」

こう娘に言うのだった。何はともあれだ。

彩奈は丈夫だった。本当に何をしても倒れたりはしない。その頑丈さでだ。

アイドルになりその頂点に立ちだ。それからも活動を続けていった。その長居芸能活動の間一度たりともだ。疲れを感じることはないまま。

アイドルになるには 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1420y/>

アイドルになるには

2011年11月2日02時07分発行